

論文 / 著書情報
Article / Book Information

題目(和文)	近現代日中におけるアジア主義・超国家主義と「民衆宗教」—大本教と道院・世界紅卍字会の連合運動—
Title(English)	
著者(和文)	玉置文弥
Author(English)	Bunya Tamaoki
出典(和文)	学位:博士(学術), 学位授与機関:東京工業大学, 報告番号:甲第12793号, 授与年月日:2024年3月26日, 学位の種別:課程博士, 審査員:中島 岳志,弓山 達也,楊 冠穹,河西 棟馬,畑中 健二
Citation(English)	Degree:Doctor (Academic), Conferring organization: Tokyo Institute of Technology, Report number:甲第12793号, Conferred date:2024/3/26, Degree Type:Course doctor, Examiner:,,,,,
学位種別(和文)	博士論文
Category(English)	Doctoral Thesis
種別(和文)	要約
Type(English)	Outline

論文要約

近現代日中におけるアジア主義・超国家主義と「民衆宗教」 —大本教と道院・世界紅卍字会の連合運動—

玉置 文弥

本論文は、近現代日中におけるアジア主義・超国家主義と「民衆宗教」の関係を、大本教と道院・世界紅卍字会の連合運動（1923-1935）の思想と運動から考察し、明らかにすることを目的とするものである。

序章では、アジア主義・超国家主義と民衆宗教の関係性が孕む問題系を定位し、それを連合運動の思想と運動から明らかにする狙いを論じた。具体的に言えば、第一にアジア主義・超国家主義・民衆宗教それぞれの思想的系譜に互いを位置付けること、第二に近現代日中関係を宗教運動の視角から論ずること、第三に連合運動の思想と活動実態を明らかにすることである。

第1章では、アジア主義・超国家主義と民衆宗教の交錯点について、それぞれの思想的 content と課題について先行研究を踏まえて論じた。アジア主義については、日中のアジア主義の類型と思想的交錯を確認し、当該研究の課題としてアジア主義における①宗教思想・運動との関わり、②運動面の具体的分析を挙げた。超国家主義については、丸山眞男・橋川文三の議論（極端—超越）を踏まえて両者の相補的關係性を確認したうえで、超国家主義における「宗教」の存在を、橋川や安丸良夫の議論を参照しながら論じた。こうした両思想は、日本では初期の頃から、特にアジア統一から世界統一へと至るという相補的思想圏を有していた。最後に民衆宗教については、東アジアに越境する宗教運動の「宗教ユニヴァーサルイズム」の思想的共鳴盤という視点からその語を用いることの有効性と、他方で安丸らが展開した日本の民衆宗教概念に対して提出された、イデオロギー性への批判を検討したうえで、いまだ民衆宗教には、上に述べたアジア主義・超国家主義に関わる重要な問題系が残されていることを指摘した。

第2章では、両教団の概要を述べた上で、思想連鎖の観点から両教団提携の教義的根拠を論じた。大本教については極端—超越としての超国家性を明治晩期から内包しており、トランス・ナショナリズム運動としての連合運動が、それに呼応していったことを論じた。紅卍字会については組織が大規模故に統一的主体を見出すのは困難であり、中華民国—満洲国の紅卍字会においては複雑な政治的立場のねじれがあることを指摘した。次に両教団の提携の根拠を再検討し、両教団は一致点として、①中国・日本の伝統的要素、②近代主義批判、③「道」＝「世界大同」思想、④キリスト教的世界観を重視したことを明らかにした。

第3章では、両教団の先行研究とその課題として、連合運動の実態とその思想的位置づけ

を挙げた。続く第4章では、連合運動初期（1923-1925）について論じた。この時期の活動はいまだ本格的な連合ではなかったが、連合運動の思想においては、両教団の近代批判的教義に基づく「宗教統一」思想と、日本の政略的アジア主義における大陸膨張主義が分かちがたく結びつきはじめある程度の思想的方向性が構築されていった。

第5章では、連合運動中期（1925-1930）について論じた。侵略主義と平和主義の両義性を孕みながらも、「世界」の志向という点では通底していた「人類愛善」を掲げる人類愛善会は大本教の実践団体として組織され、東瀛佈道団の訪日によって、紅卍字会と組織・教義の両面において“融合”していく。それは同時に日本の関東軍や満鉄との関係が強化されたように、日本の軍事・政治動向に著しく左右されるものとなることと共にあった。これに、「満蒙独立」を実現する運動として期待をかけたのが内田であったが、その関係からは硬直化しロマン化したアジア主義の終焉が見えてきた。それはまた、大本教の思想がすぐれて政略的アジア主義なものへと横滑りしていたことの表れでもある。

第6章では、連合運動後期（1931-1935）について論じた。満洲事変勃発後、連合運動は慈善活動と建国を支援する政治運動を展開する。建国後、大本教は紅卍字会の基盤に乗ずる形で慈善活動を行い、他方で関東軍とともに宣撫宣伝活動も行ったが、中華民国の批判はさらに強まった。満洲国における大本教の信者の動態を見ると、「内地」と同じく信仰体の入信者は昭和神聖会が結成される頃には減少がみられた。また王仁三郎が建国後の当地における活動を主導できなかったことに加え統治方法に対する批判を行ったことで、大本教は満洲国から引いていくが、今度は国内改造・昭和神聖会へと乗り出した。この時王仁三郎によって提唱されたのが、「アジア連盟」設立のためには日本が「神国」とならねばならない、というアジア主義・超国家主義の交錯した思想であった。こうした活動はすべて、実体をあまり伴ってなくともスペクタクルの重視によって、極めて大きな勢力に見せかけることに成功した。その意味で、満洲国における連合運動は第二次大本事件の要因の一つとして「張子の虎」的な役割を演じたと言える。

第7章では、連合運動が第二次大本事件によって終結したのち、どのような事情が日本・満洲国、中華民国で出来たかを踏まえたうえで、その後日中戦争・大東亜戦争期において日本において展開された世界紅卍字会後援会なる運動の発端から終焉までを論じた。同後援会には、旧大本教信者や軍人、政治家など多種多様な人物が参加し、それぞれの思惑が交錯する中で、外務省文化事業部の助成を受けて活動していた。その目的は、「日満支親善」「大東亜戦争完遂」にあったが、こういった活動は中国の紅卍字会とはほとんど関係なく行われ、やがて神道系サークル篁道大教に合流していった。

終章では、以上をまとめ、アジア主義・超国家主義の思想的系譜に越境する民衆宗教運動の実像を位置づけたこと、そして民衆宗教としての大本教には初期の段階から先天的に超国家的志向が内在化されており、それが「宗教ユニヴァーサルイズム」やアジア主義と接続され、具体的なトランス・ナショナリズム運動へと展開したことを論じた。また宗教の視点からアジア主義・超国家主義を見ることで、それらを単なる政治的道具ではなく、アジアの思想的

伝統から胚胎された思想的営為として捉えるべき側面があることも指摘した。総じて、連合運動の思想と運動は、アジア主義・超国家主義と民衆宗教の関係として捉えることが出来るのである。